

桜の植樹「百年」物語

未来へつなぐ ひこばえ を育てたい



桜土手のいたるところで、古木の根元から、未来へ向かってひこばえが力強く伸びている様子が伺えます。
※ひこばえ＝根元から生えてくる若芽。

もうすぐ桜の季節。青空・桜菜の花の三拍子そろった権現堂堤(桜土手)は見入る人すべてを魅了します。
1920年の桜の植樹から100年となる2020年、NPO法人幸手権現堂桜堤保存会理事長の並木さん、会員の木村さん・中村さんに、桜を未来へつなげるための思いを、お伺いしました。

NPO法人幸手権現堂桜堤保存会

現在、会員は85人。うち2割が女性会員で、最年長は85歳です。力仕事は男性、お花のお手入れなどは女性のほうが気が利くというか上手です。
毎月第4日曜日(12月は第3日曜日)の午前9時から、クリーン作戦をおこなっています。365日交代しながら枯れ枝拾いや草むしり、水やりや薬を塗るなど、四季の花を楽しんでもらえるように保存活動をしています。



木村さん

会員の桜土手への思い

一度は伐採されてしまいましたが、長さ1kmの堤に約1000本ある桜を管理しています。昭和24年に植樹された桜ですが、本当によく残っていると思います。

この桜を後世に残したいという思いは会員みな同じで、一人でも多く桜土手を思う人、守る人が増えていけばいいと思います。そのためには後継者を育てることも必要です。

また、桜土手を子ども達の遊び場に！という思いから、ヤギとのふれあいや稚魚の放流体験など、関心をもってもらえるようにしています。

樹齢70年を超える桜

一般的にソメイヨシノの寿命は70年〜80年です



中村さん

が、樹齢100年の桜も存在していると聞きます。幸手の桜は、昭和24年に植樹されたものですが、皮が盛り上がって、そこから虫や病気が入り、あまり良い状態とさええない桜もあります。ですが、峠の茶屋の前の桜をはじめ、ひこばえがたくさん出ています。これは樹勢がよい証拠ですし、枝先まで桜が咲いている木は丈夫な証拠です。手入れをしながら、大切に守り育てていきたいです。

先人から受け継いだ財産

観光資源となった桜土手。幸手の財産でもあり、埼玉県の財産です。全国的に有名となり、たくさんの方が見に来てくれるのでありがたいです。市民のみなさんにも「自分たちのふる里の堤」という気持があると思いますので、みんなで守るものであり、未来へ残すものと考えています。

桜を訪れる人を守る

桜を訪れる人達を守るために、幹や枝の傷口に薬を塗ったり、折れてしまった枝などを除去したりと日々保存活動をしています。

特に子どもの目の高さ、枝が目当たってケガをしないような配慮や、遊歩道や斜面などでケガなどをしないように安全面を考えながら整備しています。

保存活動への励みの声

四季を通じて、「キレイなお花を咲かせてくれてありがとう♡」「保存会のみなさんのおかげです♡」という言葉が何よりの励み言葉ですし、一番うれしいです。



並木理事長の思い

桜土手への思いはたくさんあります。良いことも悪いことも、幼い頃ここで「遊んだ」ではなく「遊ばせてもらった」という思いが強く、家においても桜土手が気になってしまっ、数えてみるとほぼ毎日ここにあります。



並木さん

特に「思い出広場」は、私たちが幼い頃の思い出がたくさん詰まっている場所ですので、あの頃のように川を蘇らせ、カエルや小魚、ホタルなどが棲める水辺の再生活動にも取り組んでいます。

幸手のひこばえである子どもたちには、この桜土手で遊んでほしいし関心をもってもらいたいです。将来、桜のひこばえと共に成長し、桜土手を守っていく人として繋がってくればありがたいです。桜の植樹から100年ですが、たくさんの方たちが桜土手を守り、盛り上げてきました。

今年の桜も、会員全員で一生懸命に手入れをしていますので、春の桜と菜の花(絶景)を楽しんでほしいし、土手に四段植わっている厚みのある桜を見てもらいたいです。そのほか、お花の育て方や、堤の歴史なども気軽に聞いてください。幸手桜まつりへのお越しを、お待ちしております。

桜の植樹「百年」のあゆみ

(主な出来事)

- 大正9年(1920) 行幸堤史蹟保存会結成後、権現堂(行幸)堤に3000本の桜を6kmにわたり植樹。
- 大正11年(1922) 桜の花も咲きはじめ、そよ風にゆれる油菜や若草の中に安らぎを求めて人が集まる。堤上からは富士山や筑波山を眺めることができた。
- 大正13年(1924) 権現堂堤が各地に紹介され、脚光を浴びるようになり露店や屋台も軒を連ねる。東京から江戸川を船で上り花見に来る客もいた。
- 昭和4年(1929) 東武線幸手駅が開設される。そこめけ屋台が権現堂堤にくり出す。
- 昭和7年(1932) 露天商も軒を連ね小屋掛けをし、芝居などの興業も行われる。東武線浅草駅から幸手駅までの臨時列車がでる。
- 昭和15年(1940) 周辺各地には製糸工場が多く、桜の時期には小旅行として幸手駅から権現堂堤まで行列が続いた。
- 昭和20年(1945) 太平洋戦争時に燃料とし、ほとんどの桜が伐採される。
- 昭和24年(1949) 栗田亀蔵氏(町長)および公民館職員などで、3000本の桜の苗木を堤約1kmに植える(そのうち約1000本が現在に残る)。
- 昭和26年(1951) 幸手町保勝会によって桜堤開きなどのイベントが行われる。人の数も多く、漫才・手品・声帯模写などの芸人を呼び、戦後最も盛り上がった頃である。
- 昭和28年(1953) 「県下観光50選(埼玉新聞)」に入選する。これを機に保勝会が桜60本を増殖。
- 昭和30年(1955) 観光協会が設立され、雪洞に電灯を点け夜桜の鑑賞もできるようになる。
- 昭和34年(1959) 川崎の離子と面神楽・千塚の手踊り・一ツ谷の飴屋踊りなどの郷土芸能の公開も行われる。
- 昭和40年(1965) 民謡踊り・チントン屋・写生・俳句・撮影・素人のど自慢・へらぶな釣り・川柳などの各種大会が行われる。
- 昭和49年(1974) 幸手駅から権現堂堤への直通バスが運行される。
- 昭和58年(1983) 行幸堤・権現堂堤が幸手町指定文化財となる。
- 昭和63年(1988) 周辺農地(1万9000㎡)に菜の花を作付する。
- 平成8年(1996) 12月に幸手権現堂桜堤保存会発足(NPO法人資格は、平成16年に認定を取得)。
- 平成23年(2011) 県営権現堂公園の指定管理者となる。